

# Pro-Feel

日本語文章品質コンサルティング／診断／アドバイス  
日本語文章カブラッシュアップ研修「推敲力は遂行力！®」  
文章ブランディングサービス「日本語お助け人®」

利益体質作りを文章から…

## 校正・校閲・リライト作業例

1. 引用文データ(p.1)
2. 考察対象箇所(p.3)
3. 引用文の校正・校閲・リライトにあたって(p.5)

プロ・フィール

磯崎 博史

Hiroshi ISOZAKI

### 3. 引用文の校正・校閲・リライトにあたって

磯崎 博史

取材・執筆をはじめとした文章表現の仕事においては、伝えるべき内容を読者にとって理解しやすい形で記述することが何より重要です。そのためには、個々の取材対象・ジャンル・テーマ等に合わせた柔軟な対応と、ふさわしい表現の工夫が常に求められると言えるでしょう。たとえば、「文化の中の文化」と言われ、人間の情緒に働きかける力の強い“音楽”についての記事執筆においては、内容や表記の正確さに加えてさらに微細なニュアンスまでも適切に表現する力が要求されます。

今回引用対象といたしました日本工業新聞社（現・日本工業新聞新社）発行『フジサンケイ ビジネスアイ』2004年5月14日号の記事においても、上記の観点から見てよりよい表現を探求するための素材と言える箇所もいくつかあると感じられます。

そこで今回は、原文（本文）に対する万全の校正・校閲を行った上で、読みやすくわかりやすい（＝文意・趣旨が正確に伝わる）、読者の満足度の高い文章となるよう一意リライトいたしました。以下、各箇所ごとにリライト例をご説明していきながら、主旨を述べてみたいと思います。

※番号を振った箇所ごとに、原文（赤文字）－ 考察内容 － リライト文（青文字）の提示という形でご説明してまいります。

※リライトに先立ち、引用文（本文）全体への校正・校閲を行い、その結果も考察内容文およびリライト文に反映させています。

※文章の骨格（記述内容の流れ）はあえてそのまま、また「好みの問題」と言える表現や、読点（「、」）の位置等についてもあくまで原文尊重の方針にて作業いたしました。

①

「東方天使女子楽団」として初来日したのは、王瓏さん（揚琴）、李曉潔さん（笛子）、馬向華さん（二胡）、常静さん（古箏）、李佳さん（琵琶）の五人。二胡や揚琴、古箏などそれぞれの分野で活躍するソロリストが集まり、昨年ユニットを結成した。

五人とも幼いころから音楽を学び、中国の音楽学院を卒業、世界各地のコンサートや音楽フェスティバルへ出演している実力派揃いだ。

↓

二胡や揚琴、古箏など

直前の文章で記された楽器名の再登場で、重複感が強くなっています。5種類の楽器名が記されたばかりですから、「各楽器」と代名詞的に受けておくのがスマートと言えるでしょう。

分野

このままでも意味は伝わるとしても、楽器名をそのまま「分野」と呼ぶ表現はいくぶん大まかで違和感も生じやすいと言えます。文全体の中で調整して表現のしかたを工夫する必要があるのでしょう。

ソロリスト

これは違和感の強い表記です。通常の見方では、やはり「ソロリスト」が適切です。

コンサートや音楽フェスティバルへ出演

助詞「へ」は主には方向や場所など具体性が強い名詞を指し示すのに使われます。「コンサートへ出演する」とは通常言わないように、催しについては「に」が妥当と言えるでしょう。

↓

「東方天使女子楽団」として初来日したのは、王瓏さん（揚琴）、李曉潔さん（笛子）、馬向華さん（二胡）、常静さん（古箏）、李佳さん（琵琶）の五人。いずれも各楽器のソロリストとして活躍するメンバーが集まり、昨年ユニットを結成した。

五人とも幼いころから音楽を学び、中国の音楽学院を卒業、世界各地のコンサートや音楽フェスティバルに出演している実力派揃いだ。

⑦

日本での中国音楽の流行について「中国文化も日本文化も源流は同じです。だから音楽に対する心を共感しあうのは、ごく自然のこと。音楽を通じて日中がひとつになることは、この上ない喜びです」と五人とも口をそろえる。

↓

「心を共感しあう」は「心」と「感」、および「共」と「しあう」がそれぞれ意味上の重複となっています。どちらも解消するスマートな表現でスッキリさせるべきでしょう。また、「心」は悪くありませんが（音楽というテーマに合わせて）もう少しロマンを感じさせる表現にしたいところです。それにあわせて、「対する」という表現を少しやわらかくするとさらによいでしょう。

↓

日本での中国音楽の流行について「中国文化も日本文化も源流は同じです。だから、音楽への想いを共有するのはごく自然のこと。音楽を通じて日中がひとつになることは、私たちにとってこの上ない喜びです」と五人とも口をそろえる。

…以上、引用文（本文）全体への校正・校閲を行った上で、各箇所の記述・表現に関する私の考察と、それに沿ったリライト文を記してみました。これらを個別にだけとらえると一見大勢に影響がないかのように思えがちですが、全体的に考えると「いくつかの重要なポイントにおける適切な記述および表現が、文章全体を高いレベルで仕上げるために必要不可欠である」ということが顕著となると思われます。

ぜひ、ご参考としていただけたら幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

プロ・フィール  
磯崎 博史

◎「伝わる社内文書」を書くための日本語研修（推敲力は遂行力！®）やコンサルティング、および文章ブランディングサービス「日本語お助け人®」等のお問い合わせやご相談は、Eメール:[isozaki@pro-feel.jp](mailto:isozaki@pro-feel.jp) までご遠慮なくお寄せくださいませ。  
HP <http://nihongo-otasukenin.jp>